

# 古代ゲルマン語 “Wald” への 宗教史的視点 II 中世

藤 本 武

(独) Religionsgeschichtliche Aspekte  
zum gemeingermanischen Wort "Wald" II Das Mittelalten

Takeshi Fujimoto

## は じ め に

第1部（新潟青陵女子短期大学研究報告 第27号 1997年）において“Wald”への古代宗教の係わりを論じた。この続きとして、第II部においては主に中世のキリスト教の自然観、創造論的自然観、終末論的自然観、自然科学的自然観などを扱うことにより、中世のヨーロッパの人々の“Wald”への多様な視点を明らかにすることを試みてみる。

### 1. 中世全般に関する自然論

#### 1-1 ヨーロッパの自然観に対する概括的言及

1966年『日本文化論への批判的考察』において梅原猛は日本人の自然観に関して、日本文化は大乗仏教の「山川草木 悉有仏性」という存在論を根幹にもち、鈴木大拙の日本文化論は日本人の自然愛を禅にのみ限定したことで偏頗があり、和辻哲郎の日本文化論はこの存在論を知らない<sup>(1)</sup>と指摘して、自然生命的存在論に基づく自然観が日本人の自然観である、と言及した。更に日本文化論との対比で、ヨーロッパの存在論は主として人間だけがもつ観念あるいは精神を中心<sup>(2)</sup>に一切の存在するものを見る存在論、すなわち観念論、あるいは物を中心として一切の存在するものを見る存在論、すなわち唯物論<sup>(3)</sup>のどちらかである、つまり人間中心の観念論か物中心の唯物論がヨーロッパの自然観の根底であると指摘した。このことはこの両者の思想の源流が中世ヨーロッパにあり、更にそれらの思想の根拠がキリスト教の創造論にあるという指摘である。このように梅原猛は、日本人の自然観との対比でヨーロッパの自然観を創造論的自然観である、と見ている。

これを更に展開したのは鈴木秀夫の風土論である。キリスト教を砂漠という風土で誕生した世界観、自然観として位置づけ、仏教とキリスト教の対比のなかで独自の風土論を展開した。そこから仏教は森林環境中心的思考、キリスト教は砂漠環境中心的思考とし、「静寂とはいえ、森林

新潟青陵女子短期大学研究報告 第28号 (1998)

に満ちた生気に取り囲まれ、その一部としてある、息づくインドの瞑想者と、人里を離れて砂漠の中で、わが息はかき消され、嵐を起こす神は遠くにあって、砂漠の中の一点にすぎない我が身が、決して宇宙の中心となり得ないイスラエルの預言者とは何と対照的であろうか。」<sup>(4)</sup>と述べ、日本の自然観は仏教に、ヨーロッパの自然観はこのキリスト教にあることを明確に言及している。

更にこれらの論を踏まえて安田喜憲は『森林の荒廃と文明の盛衰』<sup>(5)</sup>の中で、「キリスト教では、神としての創造主は、まず人間をつくり、つづいて人間に利用されるために家畜をつくった。

(中略) (西欧の牧畜民の) 思想体系のなかには、神—人間—動植物を含めた自然というタテ系列の思想体系が形成され差別意識、選民意識とともに西欧の自然観を大きく決定づけることになった。すなわち西洋自然観においては、自然は人間と一体に同列にあるのではなく、人間に利用されるために、人間よりあとにつくられたものであり、人間の次にランクづけされるものである。超越的な神は唯一絶対であり、自然は神によって創造されたものであり、その運行は神の摂理のもとにあり、神の意志による終末の運命をもつ。<sup>(6)</sup>」と言及している。ここで定義されている西洋自然観がヨーロッパのどの時代のどの地方のものであるかは不明であるが、概括的に西洋自然観がキリスト教の創造論に基づき、現在に至るまでの思想体系が中世に基礎づけられ、ヨーロッパ中世を支配した宗教がキリスト教であるという指摘を考慮すれば、ここで定義されている西洋自然観はヨーロッパ中世の自然観全般への言及である、と解釈されえる。そのことは、花粉分析によるヨーロッパの森の変遷が中世に激的に変化したという指摘からも、推測される。

安田喜憲によると、旧西ドイツのミュンヘン南西75キロにあるハスラッヒャー湖 (Haslacher) 海拔765メートル前後、の花粉分析は、約1万年前から8千5百年前、マツ属の優占する時代、8千5百年前から5千年前、ニレ属、シナノキ属などオーク混合林の時代、約5千年前以後、ヨーロッパブナ林がトウヒ属などの針葉樹とともに拡大する時代、紀元0年を境いに、ヨーロッパブナやモミ属の花粉減少、かわってコムギなどの栽培植物とヘラオオバコ、ヨモギ属など雑草の花粉増加、その後、一時的に森林の回復、中世はヨーロッパブナの花粉残存、近世1600年頃以後、ブナ属やモミ属の花粉急減を物語るという。<sup>(7)</sup>

デンマーク・ソルソー湖 (Sølsø) の花粉分析、イギリスの北ヨークシャー・トレガロン湿原の花粉分析<sup>(9)</sup>を参考にして、中部西部ヨーロッパ文明の基層は、新石器時代の、つまり古代ゲルマン語 “Wald” の、森は落葉ナラ類を主体とするオーク混合林であり、ヨーロッパブナの歴史は3千年前から4千年前の歴史しか持たない、紀元0年頃のヨーロッパブナやモミ類の減少はローマ時代の農耕や牧畜による森林破壊、中世の花粉減少は開墾による森林破壊、1600年頃の急激な森林破壊による耕地と放牧地の拡大により森が再生不可能になったこと、と解釈している。<sup>(10)</sup> 中世の森林破壊は中世修道院の開拓による牧畜と耕作の混合農業によるもので、キリスト教の創造論的自然観がその根底にあるとしている。<sup>(11)</sup>

## 1-2 中世キリスト教自然観についての論究

リン・ホワイトは「現在の生態学的危機の歴史的根源」を西ヨーロッパ文明のなかで、西欧キリスト教に遡らなければならないことを強調した。西欧キリスト教は人間中心的宗教で、「人は神の自然に対する超越性を大いに分けもっている。キリスト教は古代の異教やアジアの宗教（おそらくゾロアスター教は別として）とはまったく正反対に、人と自然の二元論をうちたてただけでなく、人が自分のために自然を搾取することが神の意志であると主張した」と言及している。<sup>(12)</sup>

リン・ホワイトは「創世記」、その他の「聖書」やキリスト教諸教父の文献を引用し、この創造論的自然観が中世の自然観であったと述べ、但しとして、アツシジのフランチェスコの自然観がキリスト教自然観としてあったことを認めているが、このフランチェスコの試みはキリスト教

自然観の中では異質であり、その後消滅したと評価していることにより、創造論的自然観がキリスト教自然観の主流であると断定している<sup>(13)</sup>。

これに対して、D・J・ハリハイは、ヨーロッパ中世の環境に対する態度には四つのタイプがあると指摘している<sup>(14)</sup>。

その四つとは、1. 終末論的なもの、2. 未知なるものへの恐怖<sup>(15)</sup>、3. 自然に積極的に働きかけるもの、4. 自然と戯れるもの、である。

第一の終末論的態度は、「創世記」の創造論における神の祝福より神の呪いこそ現実とする古代の教父達の解釈に由来する見解と見ている。教父テルトリアヌスは紀元2百年頃「地上は開発しつくされている」とし、過剰人口と資源の枯渇を憂えている。古代最大の教父アウグスティヌスは、「神の呪いによって自然は人間に反逆し、飢餓、悪疫、死、その他もろもろの悲惨に満ち満ちている」と述べ、将来の社会に全く期待できないから、神の国を求めねばならない、とした。これらの証拠から、自然は人間に限界と苦境を迫る終末的な存在と見られていた、と指摘している<sup>(16)</sup>。

第二の「未知なるものへの不安」という態度である。ヨーロッパのキリスト教の六世紀から十世紀にかけて見られる態度である。人々は古代社会が崩壊した後でも、都市に住み続け、都市の外側に散在する自然への不安を抱くようになった。カール大帝の時代、九世紀初期になっても、ヨーロッパの人々は人口減少にもかかわらず都市や集落に住んだ。人々の心性の根底に未知なるものへの不安があったと考えられる。キリスト教が都市の宗教であるといわれるゆえんである、と見る<sup>(17)</sup>。

第三は自然に積極的に働きかける姿勢である。創造論的自然観に由来するとしている。十二世紀南フランスを中心としてヨーロッパに拡大した思想で、古典古代のプラトンの影響を受け、十二世紀ヨーロッパの社会状況を反映して、神、人間、自然の三つの世界の創造と発展に関する宇宙論に関心を持ち、人間の役割を強調した<sup>(18)</sup>。

第四は自然と戯れる態度であるが、十二世紀、十三世紀のもので、代表はアツシジのフラチェスコである。彼は自然界を満たし動かしている諸力に個性と威厳を与えた。自然に対して愛をもって接し、そこに憩いと喜びを感じる姿勢はフランチェスコ一人だけのものではなく、十二世紀の新しい人たちである大学生、学者、宮廷の騎士や貴族などの間で一般的であり、トルバドールやミンネンズィンガーの詩人たちはこの態度で、自然を賛美した<sup>(19)</sup>。

これらの論究を踏まえて、これ以後、中世を初期、盛期と末期の三期に分けて、中世の“Wald”に関するキリスト教を中心にした自然観を詳論していくことにする。

## 2. 中世初期の“Wald”への自然観

### 2-1 二つの文明に根ざした自然観

古代の二つの文明、ギリシア・ローマ文明とケルト・ゲルマン文明の自然観は中世初期においては人々に深い影響を与えた。ヨーロッパ中世は全体的にキリスト教化されたが、そのキリスト教化の完成がどの時点であるかを定めるのは非常に困難なことである。何故なら、教化されない人々は常に存在したし、教化されても表面的であり、その本質は依然変化していない人々も多数であった。中世初期において特にそうである。部族の長、王国の王、領邦諸侯がキリスト教化することにより、キリスト教化が進展するが、多くの人々はそれに従ったに過ぎないとも言える状況が各所で見られ、未だキリスト教の侵入していない地域も多数存在したことを考慮すれば、この二つの文明の自然観が中世初期の人々に影響を与えたというより、中世初期の人々の自然観そのものであり続けた、ともいえる。今一度、このギリシア・ローマ文明の自然観とケルト・ゲル

マン文明の自然観を以下にまとめる。

#### ギリシア・ローマ文明に根ざした自然観

##### a. 自然科学的、客観的自然観

ギリシア哲学者、特に自然科学的哲学者による宇宙論、世界観、自然観であり、自然を客体として把握しようとする自然観である。

##### b. アニミズム的自然観

ギリシア神話やローマ神話にあらわれる自然の内部に神々、精霊、妖精などのアニマー（靈魂）が存在すると見る多神教的自然観である。

##### c. 文明論的自然観、または都市民住形態的自然観

地中海沿岸地方特有の居住形態は文明化された集落、町、都市に住む形態である。空間的に分離された自然を文明に敵対するもの、恐怖や不安を与えるものと見る自然観である。

#### ケルト・ゲルマン文明に根ざした自然観

##### a. アニミズム的自然観

樹木、岩、泉、森林、十字路、木の枝、木の葉、オークの木などの自然に神々を認める多神教的自然崇拜に基づく自然観である。

##### b. ケルト的自然愛的自然観

自然を愛し、自然に親しみ、自然を讃美し自然の中に住んだケルト人の自然観である。

これらの自然観は第1部古代の部で述べた。次にキリスト教文明に根ざした自然観について述べるが、それらの自然観の中には、ギリシア・ローマ文明の自然観、ケルト・ゲルマン文明の自然観と重複したものがあるが、それはキリスト教文明の中にもすでに内在している自然観であるが故に敢えて挙げるものである。

## 2-2 キリスト教文明に根ざした自然観

### a 文明論的自然観

文明に対立する野蛮なもの、未開のものと自然を見る自然観である。文明と対比される自然の代表が森であった。中世初期の人々にとり、森は文明の規範や慣習から人々を隔離し、文明を暗黒の中に飲み込もうと不断に狙っている畏怖すべき自然の代名詞であった。

これは古代オリエントやヘブライの人々にとっての「荒野」や「砂漠」の概念に対応している。（第一部ギルガメッシュ文明参照）ギリシア・ローマ文明におけるプラトンの概念に基づく神の光を奪われた暗闇の存在としての森の系列にあるものである。文明都市に居住する地中海型居住形態は中世西ヨーロッパに拡がっていくが、この文明化された集落や都市に住む中世の人々の隔離された自然への恐怖心に根ざした自然観である。

中世初期の叙事詩やサガや英雄伝説には、自然への敵意と自然への恐怖におののく人間が登場している。例えば八世紀前半の古英語叙事詩『ベオウルフ』では、恐ろしい怪物グレンデルのすむ沼が描かれ、1204年頃ドナウ地域のオーストリア人による英雄叙事詩『ニーベルンゲンの歌』では、凶悪な怪物ドラゴンが山や森に住み、恐怖の象徴として描かれている。この『ニーベルンゲンの歌』は437年のブルグンド王国滅亡や600年頃のフランクのメロヴィンガー王朝の出来事を基にしていると考えられている。<sup>(20)</sup>

### b 悪魔論的自然観

これは偶像崇拜禁止に起源をもつもので、旧約聖書の「申命記」に「異教徒の聖なる森を切れ」(申命記7の5参照、「聖なる森」は日本訳ではアシラ像とされる)とある。その後、ヨーロッパにキリスト教が導入されると、その神話において、森は獣性、墮落、教義からの離脱、地獄と解釈されるようになる。古代教会教父は森を物質自体の無秩序と解釈した。西方教会最大の教父アウグスティヌスは『告白』の中で「このように畏と危険にみちた広大な森の中でわたしが断ち切り、心から追い払った誘惑は数知れない」と回宗以前の人生を森と述べている。<sup>(21)</sup>中世において、アニミズムの多神教の自然崇拜禁止により、森は異教徒の聖域と見られ、森は敵対視された。中世初期の当初、ケルト・ゲルマンの自然崇拜の神々や精霊のキリスト教義における位置づけは禁止の対象ではあっても未だ不明確であったが、後にそれらの神々や精霊は悪魔とされた。それにもない悪魔の棲む森も悪魔化された。

五世紀のアールの公会議以降中世を通して教会は樹木、森、泉、石、十字路に対する礼拝の禁止など異教的習慣の抹消の決議・布告・勧告を何度もおこなっている。五世紀トゥールのマルティヌス(聖人)は異教徒の聖なる松の樹の下に立ち、この樹を切ってしまうと命じた。切られた松は彼の方に倒れかかってきた。彼が十字を切ると、松はひとりで起き上がり、別の方角に倒れた、という聖人伝説、更に第一部で述べた、八世紀ドイツ・ヘッセンでボニファチウス(聖人)がゲルマンの聖なるオークの樹を切った、という聖人伝説、これらの中では、自然崇拜の神々に対するキリスト教の神の超越性が示めされてはいるが、未だ多神教の神々はキリスト教によって悪魔化されていない。

六世紀スペインのプラガの大司教マルティヌスは『田舎人の矯正』の中で、「さらに、天からおくられたデモン(悪霊=悪い天使)の多くは、海、河、泉をすみかとしたり、森をつかさどったりしている。そして同様に真の神を知らぬ人々は、かれらを神々とみなして犠牲をそなえている。海ではかれらはネプチューンを礼拝し、河ではラミアー、泉ではニンフ、森ではディアーナをあがめている。これらはすべて、悪しきデモンで、おそるべき霊であり、十字架の印で身をまもる術を知らない不信心の輩を害し、さいなむ」と述べている。

初代フランク王クロヴィスの息子ヒルデベルト一世の554年の勅令はデモンに捧げられた自然の破壊命令であった。789年カール大帝はケルト・ゲルマン的自然崇拜禁止の勅法(カピトゥラリア)を布告した。「無知な者たちが、樹や岩や泉にロウソクの火を灯し、その他の習慣を行うことについて、万人に通告する。それは神を冒瀆するこのよなく邪悪な習慣である。除去し、破壊すべきである。」<sup>(22)</sup>と。

アニミズムを敵対視し、キリスト教の絶対性確立を目指す宣教神学はアニミズムに対して三つの態度をとった。一つはアニミズムの禁止・破壊である。だがこれは拒否、拒絶であるので、ヨーロッパをキリスト教の外側に排除しかねない。そこで第二の態度をとる。アニミズムの信仰対象をキリスト教の聖なるものへと置換し、キリスト教化を容易にする態度である。例えば12月25日は元来太陽神崇拜による冬至の祭りの日であったのを、キリスト教はキリスト降誕の祭りへと置換した。他のもう一つはアニミズムの神々を悪魔にするという内化の態度である。本来キリスト教の内部概念であった悪魔の範疇の中に異教の神々を位置づけることによって、アニミズムの神々をキリスト教の内部に一旦受容する。その後で神によって破壊されるべき悪魔というレッテルをはって森に追放する。追放されても悪魔化されたアニミズムの神々はキリスト教の内部に留まらざるをえない、という構造である。これによってキリスト教は神学的にヨーロッパの全領域をカバーし、全ヨーロッパをキリスト教化する理論的根拠を獲得したといえる。それが中世に確立し

た。この理論に従って、森は悪魔化されていった。<sup>(23)</sup>

この三つの態度の第一と第三は、中世の森の破壊・開拓に道を開いた要因の1つであった。

### c 終末論的自然観

三世紀の修道院設立者のパコミウス（290年頃～346年）は「何よりもまず、終の日を常に念頭におき、永劫の苦しみを恐れ続けなさい」とキリスト教徒に終末の日にそなえて生きることを勧告している。教父ヨハネス・クリュソストモス（347年頃～407年頃）は「（キリスト教徒の）一番の特徴は死を求め、死を愛することである」という死を崇める教義で有名である。前述の西方教会最大の教父アウグスティヌスも同様に「私たちは、やがて死すべきこの身体に存在し始めたときから、一日として死の近づかない生を送ることはない」と死への関心を示している。これらの言及は終末論的な論述の多くの中の二、三の例を挙げただけに過ぎなく、キリスト教の教父たちが終末的に生きることをキリスト教徒の在り方であると見ていたの間違いはない。それを典型的に示しているのは修道士においてである。それを代表するのが西方教会の修道院制の創設者ベネディクトゥス（480年頃～543年頃）である。彼はベネディクトゥス修道院規約において「最後の審判の日を恐れ、地獄におびえ、信仰を尽くして永遠の生命を求め、死を片時も忘れるべからず」という最後の審判に結びついた終末思想を示している。この思想に従った生き方が修道士の本分であると定めた。この終末思想「memento mori.」（＝死を憶えよ。）<sup>(24)</sup>は中世以来今日に至るまでヨーロッパを貫き通してきた。<sup>(25)</sup>

この終末思想が現実の生活を捨てさせ、神的生活へと人々の関心を促がすのは当然であった。従って、古代から中世のキリスト教神学は、キリストの神性と人性、三位一体論、神の国、復活、死後の肉体、再臨、終末と関心は神と天国についての論義に集中し、唯一絶対神への絶対服従の要請にもとづき、人間の現実に係わること、出産、性、結婚なども自然の営みとする考えは非難され、人間の現実の生である現世の生は「罪」として否定された。地上、この世、現世、肉の生活、森をも含めた自然も共に現世的存在全ては「罪」の概念と同義語とされ、自然への価値評価は与えられたとしても、極めて低い価値しか与えられなかった。

### d 創造論的自然観

旧約聖書の「創世紀」に基づく自然観であり、よく伝統的とか正統的とかいう形容詞がつけられる自然観である。その故にか、キリスト教の自然観といえはこの創造的自然観と誤解されることが多い。「創世紀」の創造物語によるキリスト教的創造論は、世界の創造は神によって無からおこなわれ、人間と自然は同じ被造物と措定された。けれども人間は「神の像に似せられて」創造されたことにより、「神の像」に似せられなかった自然と区別された。「神の像=imago dei」は、理性（ヌウス）と霊性（プニユマ）と解釈され、人間はその理性と霊性を有するゆえに、同じ被造物である自然を治めるものと設定された、とするものである。このように創造論の神・人間・自然の位置関係が決定され意味づけされた。それは人間の上部存在である神が下部存在である人間を治めるように、自然の上部存在である人間が下部存在である自然を治めるという解釈を導き出すことになる。ここから自然に対する人間の従服・克服・支配・開発・利用・搾取・疎外・破壊・責任・保護・保全という様々な姿勢が「神の善」とした行為である、とするキリスト教神学が成立した。但しこのキリスト教的自然観は、神学自体として誕生したのではない。そうではなく、現実の方が常に先行していて、その現実に対するキリスト教的意味づけがその時代その社会から要請され、その要請の応答として、初めて成立したキリスト教神学による創造論的自然観である、この点を強調することはキリスト教文明に根ざした自然観の形成を見る際に特に必要で

<sup>(27)</sup>  
ある。

中世初頭において創造論における人間の自然に対する開発という概念が時代と社会の要請であった。このような時代と社会の要請に応えるものとして、この創造論的自然観は今日の時代まで幾度も登場することになった。

#### e 聖域論的自然観

キリスト教の神は人格神であるため、本質的に場的思考を拒否する、にも拘らず、旧約聖書時代すでに、偶像崇拜との対決により、聖性と造られた人工物との結合を認めない反面、聖性との出会いの場としての荒野や砂漠を選び、そこを聖域とした。イエスの修行の地はクムラン教団の聖域である砂漠、荒野、洞穴という自然の中であったといわれているが、新約時代イエスは造られた神殿を否定し、人格こそ神の住む場とし、神の国、教会という聖域を人と人との人格的信仰の集合体、共同体の上に置いた。古代、キリスト教は、自然崇拜のアニミズムとの対決により、かつて聖域であった荒野、砂漠、山、森林という自然の場を否定して、かつて否定した造られた聖堂を聖域とした。キリスト教史において、人格に結びついた聖性は、人々の記憶と崇拜により場的論理を獲得し、聖地、巡礼地、修行地としての地位を占めていった。

古代ヨーロッパには「森の神」が広範囲に分布していて、「神」という宗教性は「森」という環境としての自然の場と密接に関連し、宗教的場である聖地を形成することによって自己を具現化した。古代のギリシア、ローマ、ケルト、ゲルマン、スラブの地域で、山林、丘、高所、山頂、岬、半島、森林、洞窟、河川、泉、岩石、十字路などを聖性の場として崇拜の対象とした。アニミズムであれ、キリスト教であれ、宗教的場である聖域は、聖性という共通性、普遍性を有している。この普遍性によりキリスト教はかつて否定した自然の場を聖域とするようになった。

中世初期から八世紀頃までコルンバヌスまたは聖ガルスと呼ばれたアイルランド出身の修道士たちがスイス近くで宣教し、古代ゲルマン語 “Wald” の森を瞑想の場とした。850年頃、北ドイツの無名作家がザクセンの聴衆のため古ザクセン方言でつくったキリスト伝の叙事詩『ヘーリアント詩』によると、聖書の荒野の概念が森林と結びつけられ、荒野が森林にとって代わられている。この詩はルール地方のヴェルデン修道院が発祥の地という説もある。<sup>(28)</sup>十一世紀、十二世紀ヨーロッパに輩出した隠修士は、例外なくうっそうたる森を苦行と瞑想の場として求めた。その隠修士、聖者の伝記には「森の中に入る」という表現が幾度も頻出し、それは人間社会を捨て聖なる地に入ることを意味していた。中世の叙事詩『ヴァレンヨインとオールソン』は森の住人オールソンが文明の規範であるキリスト教の根本教養を習得し、騎士となるが、再び人間社会を捨て森に入り、聖なる隠者となる物語である。<sup>(29)</sup>

かくて、今日でもアトス半島は女性入山禁止の聖地。ギリシア半島やエーゲ海の島の山頂の修道院、パリの丘の上のサクレ・クール教会、「聖ヨハネ」が黙示録を書いたとされる洞窟の丘の上の修道院は洞窟崇拜と高所崇拜の両者の要素を持った聖地、フランスのルルドの洞窟もキリスト教の聖地である。地中海地域の修道院とシトー派修道院の周囲には聖地としての森が多く残されている。西ヨーロッパのキリスト教巡礼地の半分は高所、次に多いのが、泉や井戸といった水のある場所、次が樹木や森、洞窟、や石のある場所である。<sup>(30)</sup>

#### f. 象徴論的自然観

中世初期からロマネスク期（十世紀～十二世紀半頃）まで、古代末期の教父たちのキリスト教神学が多大な影響を及ぼしたことを終末論的自然観の項ですでに述べた。それらは地上の生の無意味さと神的理念の崇高さという対比で中世において宣教されるようになった。ラテン語詩の形

式によるその教義によれば、人間の感覚によって知覚され、感性によって受容される、この世のありとあらゆるものは卑しく罪と汚れに満ちたものであれば、神聖な啓示はあたうるかぎり象徴的衣装にくるんで表現されるべきであるとされた。この教義によって、自然は神的世界の象徴と意味づけされた。山や川、雲や星とその運行、動植物やその成長、潮の満ち引きなどは、それ自体としては全く無意味だが、神的世界の照射されたもの、キリスト教的な美徳、悪徳の象徴してかけがえのない重要性を帯びることになった。日の出や春はキリストの復活を象徴し、四季の移り変わりは地上の無常を暗示し、バラは殉教者の死や栄誉を、ユリは純潔や思慮を象徴するものとされた。かくて、自然は神の国の不可視の秘義を自然の可視の現象にたとえて表現されたものとされ、自然はキリスト教の象徴表現として積極的価値を与えられることになった。

### 3. 中世盛期の“Wald”への自然観

T. G. ジョーダン<sup>(31)</sup>は、中世ヨーロッパ思想家たちに関して、中世キリスト教思想家たちは地球を人間の利用のために与えられたもの、人間を神の創造を助ける僕として創造されたものという理念を展開させた。この理念に基づき、中世修道院は森林を切り開き、湿地を干拓する開墾をアニミズム消滅のための神の業とみ、積極的に展開し、西ヨーロッパ全体の原生林、荒地を切り開いた、と述べている。

中世初期の段階でキリスト教文明に根ざした自然観が多様であることをすでに示したが、それではジョーダンの指摘の如く、中世盛期においては、創造論的自然観にキリスト教の自然観は集約されてしまうのだろうか、新しい自然観は芽ばえなかったのだろうか、これらに関して以下に論じる。

#### 3-1 中世盛期の自然観

##### a 十二世紀の自然観—シャルトル学派を中心にして

中世初期の自然観に顕著な変化が見られるのは十二世紀である。この変化を促進した要因は二つあった。第一の要因は、開墾による自然との係わりという現実である。この現実とは自然と人間との係わりが容易ならざるものであり、その認識により自然を意識的に反省しようという気運をひき起こし、宇宙を含んだ自然を第一の思想的課題の座に現実が強引に押しあげた、といえる。第二は十二世紀にスペイン等イベリア半島のイスラム文明を通して導入されたイスラムやギリシア・ローマ遺産の摂取である。これらの文明の遺産によって現実の思想的課題に答えようとしたことである。

古典古代哲学者の著作の中で、十二世紀の思想家たちに最も影響を与えたのはプラトンの著作、とりわけ、カルキディウス訳の『ティマエウス』とされている。このようにプラトンの影響を受けた思想家たちをシャルトル学派と呼び、それに近い思想家たちも含んで、彼らはプラトン主義あるいは新プラトン主義の絶大な影響の中で、思索をおこない、自然学の世界を築こうとした。

フランスのシャルトルを中心にしたこのシャルトル学派には、ジョン・オブ・ソールズベリ、アラン・ド・リール、ベルナルド・シルヴェストリス、ユーグ・ド・サン＝ヴィクトル、ティエリ・ド・シャルトル、ギョーム・ド・コンシュなどがいた。

十二世紀思想家のプラトン主義的キリスト教神学による自然観は、一般的に、自然の構成や働きと自然の中での人間位置とが神や三位一体論との関連で、思索され、自然＝宇宙は秩序を構成し、その諸存在は階層化しつつ連続・関係し合う。宇宙と同様、人間も四元素から成立し、その配分は、人間の運命を宇宙の運命と重ねあわせるものだという自然理解であった。ここにおいて中世は初めて自己と周囲の自然環境とを自己の考察の対象と見すえ、自然と人間関係を模索し



始めた、といえる。<sup>(32)</sup>

とはいうものの、シトー派修道士アラン・ド・リールは、そのアレゴリカルな詩において、いまだ、女神＝自然を人跡未踏の山頂の林を棲家とし、女神＝自然の顔を誰れも拝むことはできず、遠くから存在を想像するしかないもの、と見ている。

十二世紀を代表するフランス・シャルトルの人文主義者ベルナル・シルヴェストリスは散文と韻文を合わせた『大宇宙と小宇宙～一世界の一体について～』（1145年～48年作）を発表し、自然である大宇宙と人間である小宇宙を別々に論じないで、それを全体としての一つのものと認識して問題にしている。ベルナルの自然論は自然の発生を取り上げ、その際人間の発生も問題にしている点で聖書の創造論的自然観を枠組にしているが、「ナトゥーラ＝自然」という神と「ヌース＝神的理性」という神によって自然は創造された、とするギリシャ・ローマ神話的自然観によって説明されている。

「東の曙光に近く、花咲く大地の懷にある場所、そこではまだ原初の日の太陽がやさしくほほえむ。若い光は何も妨げない。天のおだやかな恵みが、花と草木で大地で孕ませる。この幸いな森では小川が曲がりくねった水路をさまよい、清流は木々とさざめき、小石を打ち囁きつつ滑り下りる。水に恵まれたこの美しい隠れた地に最初の人間が客人としてほんの短い間住んだと思われる<sup>(33)</sup>」とベルナルは自然を描写している。これにより、ヨーロッパはベルナルによって自然を発見した、といわれている。

大宇宙としての自然と小宇宙としての人間は対応され、人間は自然から「ヌース」を受け取り、肉体という「ナトゥーラ」を自然から受けとって創造されたから、宇宙の自然＝本性は、人間の自然＝本性を開示し、身体秘密をあばくことにより、そこに投影された宇宙の構造原理を知ることができる、とした。ここにはキリスト教的要素は乏しく、思惟の対象としての自然の発見がなされている。

これより20年位後、イングランドのヨークシャーのあるシトー派修道院リーヴォーの修道士ウォルター・ダニエルが『アイルレードウス伝』を書いた。この修道院は1132年に設立され、ウォルター・ダニエルは自分に仕えた修道院長アイルレードウスの伝記を1170年頃まとめた。

「彼ら修道士たちの小さな住まいと、その住まいのある場所の名リーヴォーは、川（リー）と谷（ヴォー）の名に由来するものであった。高い丘が谷間の周囲を冠のように取り囲んでいる。それはさまざまな木々に装われた楽しい隠れ家で、谷は静寂を保ち、修道士たちに緑の喜びで溢れるいわば第二のパラダイスを提供している。峨々たる岩山からはるか下の谷へと、渦巻く水はどうどと転げ落ち、急流となって狭い川床を通り抜け、やがて、やや広い小川へと広がっていく時、流れは柔らかな音を優しくつぶやきながら、甘美なメロディを合唱する、また、美しい木々の枝がさやさやと音を立てながら合唱し、木の葉がはらはらと優しく地上に落ちる時、幸せにもそれに聞き入る人々は、その和音のすばらしい祝福に<sup>(33)</sup>いよいよ心満たされるのである。」

シトー派修道院は開墾により自然破壊をおこなった最大の修道会と見なされているが、そのシトー派修道士は全く別の面をここで表現している。現代に描写されたといってもよい、自然への親近性と自然への鑑賞とにより新しく自然が発見されている。

## b 十三世紀の自然観

十二世紀最高の霊的指導者聖ベルナル（1090年～1153年）が初代院長であったフランスのシトー派修道院クレルヴォーについて、十三世紀『クレルヴォー修道院地誌』<sup>(34)</sup>が記されている。

「果樹園の尽きる所から菜園が始まる。菜園には小さな掘割、というよりも小さな水の流れが通っていて、菜園を方形に区切っている。しかもここは、木々に覆われた岸辺で休もうとやって

くる病弱な修道士たちの目に楽しい風景を提供するところである。ここで病弱な修道士たちは、水晶のように明るく輝く水のなかをあたかも行進する兵士たちのように群れをなしてあちらこちらを泳ぎ回る魚を見て楽しむことができる。これら水域の水は同時に魚を養ったり、庭の野菜に水を供給することにも役立っている。この水流は修道院の多くの作業所を通り抜けていくが、その忠実な奉仕ぶりにいたるところで感謝されている<sup>(34)</sup>という自然描写に続き、この水流が水車を動かし、草工場、織物工場、洗濯、粉引きに利用されることを記している。

十三世紀はヨーロッパが社会的に経済的に大変化している時期であり、それに適応していく修道院の状況が示めされていて、十二世紀にすでに見られた、自然に目覚め、自然の美しさに感動し、自然を再発見する自然認識に加えて、十三世紀特有の自然の利用、水車の普及、自然の人工化、自然力の利用などの自然認識へと多様化している。

十三世紀の思想家たちはギリシャ哲学のアリストテレスの自然学体系とアラビアの哲学者によるアリストテレスの注釈の流入を受容した。プラトンのイデア論や宇宙論を拒否し別種の自然像を提示した。アリストテレスは、すべてが資料から形相へと運動するが、その運動の主体としての運動体は分割可能な一定の大きさを持っていて、霊魂は自然的で可能的に生命をもつものではない、と理解され、プラトン主義のような宇宙・自然全体に働く宇宙的原理を認めるイデア論は退けられた。彼らは神学的アレゴリーを用いて自然を解釈せず、人間の理性を信頼し、理性を自然に適用して、合理的自然観をつくりあげた。それは自然科学的自然観または機械論的自然観ともいえる<sup>(35)</sup>。この自然観を主張する十三世紀の代表的神学者はトマス・アクイナスである。

宇宙、自然、天体、人間の心身、動植物、それらの器官、極小の四元素に至るまで、各レベルで組織、組成の一般法則、作用と分類が資料、形相論によって解明された。存在と有機体の機能論は目的論的見地によって説明され、観察、実験、数学の利用が採用された。こうして自然は一種の機械として見られることになる。

十三世紀以降の思想は、自然に関して、機械と機械力の観念が一般化され、未だ素朴ではあるものの自然を人間の意図に添う巨大なエネルギー源とみなす傾向が強化されていった。

### c. 脱悪魔化の森

中世初期自然は悪魔の領土とされた自然観が十三世紀になって変化した。十二、十三世紀の哲学、神学の新しい傾向であるアリストテレス的合理的自然観と十三世紀のアリストテレス的神学者トマス・アクイナスの「自然界には神は存在しない<sup>(35)</sup>」という教義などにより、善悪は「人格」と人格の「意図」が<sup>(36)</sup>あってはじめて生じる倫理的関係であり、その責任もその「人格」にあるという新しい神学が生まれた。この神学が森を「脱魔化」した。

1220年頃の武勲詩『ユオン・ド・ボルドー』<sup>(37)</sup>はカール大帝の騎士ユオンが森で妖精の王オペロンの魔力と聖なる力に出会う英雄物語であるが、この作品の中で、オペロンの超自然力はもはや森という神秘的な「空間」にあるのではなく、その業をおこなうオペロンの「人格」に内在するものとされている。

これは超自然的現象が一定の森という空間内部に限定されず、魔力を行使する人格の移動に従い至る所で惹起されることを示めている。森という場の魔性は無性化され、森の奥深い只中であっても人間は安心して活動可能となった。かつて森という自然の「空間」にキリスト教によって追放されたアニミズム的魔性、超自然現象、魔力は、十三世紀になり、個々の「人格」—それは悪魔に誘惑された人間、動物、妖精、悪魔、悪霊も含くむ—に内在するものとして、「人格」に追放されることになった。

#### d 異空間としての森

十二、十三世紀の騎士文学にあらわれる森は「異空間」として人間の容易に近づきえない場であった。王の権威、国家の正義、都市の法、宮廷・都市・農村の社会制度は効力を有効としえない場であった。森は、隠者、アウトロー、狂人、盗人、編歴騎士の棲む空間であった。

1180年頃、クレティアン・ド・トロワの著名な英雄物語『イヴァンまたは獅子の騎士』はイヴァンが狂気により、森に入り、森で、神秘的力を有する人格、妖精、幻獣に出会い、自分自身も神秘的力を獲得する聖なる空間、魔性の空間と捉えている。<sup>(38)</sup>

#### e 文明化された自然

回廊をめぐるした中庭の中央に井戸や泉をすえ、周囲に芝生や樹木を配置する、井戸や泉は日常の必要のため、中庭全体は慰藉のため、エデンの園を模倣した霊的空間としての庭園が中世には存在した。十三世紀の世俗文学に登場し、十四・十五世紀の絵画にも描かれる対象となった。それは自然そのものではなく、人工的な植木の森、人工的な自然であった。歴史的には、古代ギリシャ・ローマの庭園は、周囲の自然景観との境界がなく、庭園は開放された「オープン・ヴィスタ」であったが、中世の庭園は「クローズド・ヴィスタ」＝閉鎖性の庭園であった。これは中世の内向性の象徴であると同時にヨーロッパ人の自然との係わりの象徴でもある、といえる。ヨーロッパでは「自然は人の手がかかればかかる程美しい」といわれるように、中世盛期の西ヨーロッパでは人間の手の係わっていない自然は存在しなくなった。古代ゲルマン語 “Wald” に関していえば、開墾された「ヴァルト」、開墾された「フォルスト」、「ヴィルトバン」、「ハイン」、開墾されずに残された「ヴァルト」とに係わらず、古代ゲルマン語 “Wald” を含めて、山川草木環境としての自然すべては、人間と係わるることにより、「第二の自然」あるいは「人工的自然」あるいは「飼い馴らされた自然」となった。その典型である修道院の回廊に囲まれた庭園は、人間の手によって飼い馴らされた文化的自然のメタファーであり、神によって飼い馴らされたエデンの園のメタファーであり、森のイメージとして森のメタファーという、三重のメタファーとしての自然を表現している。

教会は自然崇拜禁止という理由により礼拝は自然から離れた屋内で行うべきとして、戸外に開いた寺院を破壊し、屋根付きの聖堂を建築してきたが、ゴシック期（十二世紀半～十四世紀初頭）のゴシックのカテドラルは、装飾に、彫刻に草木花を受容、カテドラル自体が古代ゲルマン語 “Wald” のメタファーである、と言える程に、「第二の自然」として文明化された自然を自己の内部へととりこんでいった。

#### f. 自然との交流

ドイツのボン近郊にあるシトー派ハイスターバッハ修道院の修道士カエザリウスは、当時の様々な教訓話、説教話、奇跡話、教理問答を『奇跡問答』<sup>(39)</sup>（1220年～35年作）に収録した。その第10部第48話は鳥への祝福の話である。

「シトー派本山シトー修道院では楽しみのために鳥類を飼うことは神意に反するとして禁じられていた。ただコウノトリだけは修道院の内外に巣をつくるのが許されていた。というのも、コウノトリは周辺一帯の植物の害虫をきれいに一掃してくれるからである。ある日のこと、季節がきてコウノトリがいっせいに遠くへ旅立とうと勢揃いしていた時、それまで修道士たちから自分たちに与えられた手厚いもてなしに感謝してか、その時野良で働いていた修道士たちの周りをガアガアと鳴き声を立てながら飛び回り、どうしてそんなことをしているのかわからない修道士たちを不思議がらせた。そうすると修道院長がやってきて修道士たちにいった。私が思うのに鳥

たちはこれから飛び立っていく許しをあなた方に求めているのです、と。修道院長は手をあげて彼らを祝福した。その瞬間いうも不思議なことに鳥たちはたいへんうれしそうに一せいに飛び去っていった。それを見て修道士たちは大いに恥じ入った。というのも彼らは旅に出る際に修道院長から祝福をうけたり、あるいは、それを待つなどというようなことを少しもこれまで考えていなかったからである。<sup>(40)</sup>」

ここには理性のない被造物と考えられてきた鳥さえも修道院長と心を通じ合わせることがありうるとして、自然と人間の交流が認められている。更に、理性を所有する故に、自然が上部存在であると人間が理性を喪失し、本来理性を所有しない筈の自然に理性の存在が示されることにより、自然が人間の上部存在であると認識されている。その意味で、人間と自然が同等の存在と見られ、その同等の存在である人間と自然の交流と共生が限定づきではあるが中世のこの時点で初めて示されている。この自然観を更に進めたのがアッシジのフランチェスコである。

### g 自然への愛

アッシジのフランチェスコの伝記は1266年ボナベントウラ作のフランチェスコ修道会公式伝記があるが、フランチェスコの死（1226年）のすぐ後1229年に書かれたチェラーノのトマス作『聖フランシスコの第一伝記』<sup>(41)</sup>がより臨場感と躍動感に溢れているという理由により、ここでは後者を用いて、フランチェスコの自然観に関して引用する。

「彼がベヴァーニヤの近くにきたときに、ヤマバト、コガラス、シロシガラスといったさまざまな種類の鳥が群れをなして集まっているのに出会った。それを見るとすぐ彼は仲間を道に残したまま小鳥のほうに急いでいった。彼の愛は理性を持たない卑しい被造物にさえ大きな慈しみとやさしさを示すほど豊かなものであった。彼はすぐそばまでいくと小鳥たちが彼を心待ちしているように思われたので、彼はいつもする挨拶（“あなた方に平安があるように—パックス・フィク・ドムイー”という、イエスが弟子たちに、伝道にいく時には必ずいいなさいといった挨拶）を彼らにしたら、小鳥たちはいつもの通り驚いて飛び立つ様子もないので、フランチェスコはすっかりうれしくなって、そこで神の御言葉に耳を傾けてくれるよう謙虚に彼らに頼んだ。彼はさまざまなことを話しているなかで、次のようなことを彼ら（小鳥）にいった。私の兄弟である小鳥たちよ。（中略）小鳥たちは、この言葉を聞くと、フランチェスコ自身また彼の仲間たちもいうように、その首を長く伸ばしたり、羽を広げたり、口をあけたり閉じたりしながら話の相手のほうをジッと見つめるなど、それぞれのしかたでその喜びをあらわした。<sup>(42)</sup>」

フランチェスコが自然に愛情を持って話しかける場面が『伝記』の至る所に出現する。話しかける相手は、小鳥たち、ウサギ、ヒツジ、キジ、タカ、魚類、太陽、月、火、大気、風、泉、大地、樹木、グミ、ブドウ、森、このように山木草木すべての自然に対してである。何故このような愛情を自然に対して抱いたかについて、伝記作者チェラーノのトマスは、天性のものではなく、神の恵みと理解している。神が与えてくれた賜物という解釈である。

更に被造物である自然にむかって彼は兄弟（ブラザー）、姉妹（シスター）という呼びかけの言葉を用いている。この用語は聖書によるとキリスト教徒一般を意味し、中世では修道士、修道女を一般的に指していた。何故自然に対して人間に用いる呼びかを用いたかについてのチェラーノの理解は、「彼が被造物を兄弟と呼んだのは、神の子たち（ロマ書）（中略）途方もなく異常なしかた、それもまだ誰れも経験しなかったしかたでその鋭い感性を使って自然の隠くされたしくみを見抜いていたに違いない。<sup>(42)</sup>」と述べている。

自然のしくみを見抜くほどの自然との一体感は、フランチェスコが瞑想の場として選んだ場所から得られたものと考えられる。フランチェスコは伝道より帰えると、山、森、洞窟、無人島、

林と自然の中に退修した。他の修道会、修道士が都会、聖堂、修道院室内、と建物の中に退修し、瞑想するのに対して、大きな相違である、今日もアッシジ周辺のみならず、イタリア各地にフランチェスコ瞑想の場が自然の中に残されている。町で説教活動をした後で、人間の手によって作られた場所、立派な修道院の内部ではなく、自然に近い場所で、暮らし、瞑想をする。その自然の中で絶えず自然との交流を持続させ、自然への洞察力によって、自然のしくみを感性的に悟ることが可能となった、といえる。

更にフランチェスコは旧約聖書詩篇22章「私は虫けらであって人間ではありません」という句を知った時、彼は自己をそのような小さな存在でしかないことを自覚したといえる。この自覚は自己と自然との同一視の自覚でもある。それ以来、歩いているときに道に虫がいて、その虫をとって道の脇によけ、人が踏まないようにした、と伝記は伝えている。同じ十三世紀の中世最大の神学者トマス・アクイナスの「動物には永遠の生命も生得の権利もなく、その生死は我れ我れ的手中にある」という理解と比較すれば、フランチェスコの自然観がいかに時代を超えた感性に満ちていたかがわかる。

### 3-2 中世盛期の“Wald”の変遷

#### a. 教会・修道院の森の開墾と保護

宗教的な土地支配者、特に修道院は中世の土地開拓に大きな影響を与えた。修道院はカロリಂಗー王朝時代は王たちによって創設され、その後の時代には領邦諸侯によって設立された。多くの修道院が、厳しい戒律に従い、寂しい土地や道のない山の中の森や峡谷に居を構えた。修道院設立の目的は記録文書によると魂の救済であるが、設立の際 王、皇帝、領邦諸侯から多くの贈与、特に土地の寄進を得た。中世初期に大規模な森の所有者になり、八世紀の修道院建設ブームで更に森の所有が増大した。十二世紀シトー派修道院などの新しい修道会が加わり、修道院の土地所有は大規模に拡大した。

中世盛期の大開墾に意味を持つ修道院はベネディクトゥス修道院、シトー派修道院、クレルモントレ会修道院である。

古代に創立された聖ベネディクトゥス修道院の会則は「オラ・エト・ラボラ（＝祈禱と労働）」を掲げ、十二世紀に至るまで西方教会唯一の修道会であった。ヨーロッパ各地にこの派の修道院が設立された。七世紀にはスイスのサン・ガレンにも修道院が設立され、ドイツに布教したボニファチウスは七・八世紀のイギリスの修道院の出身であった。次第にこの派の修道院は広大な土地と財産を所有することになり、土地開拓に特別な意味を持つようになった。修道士により、未開の荒野や森林を取り除き農地化すること、農耕や牧畜の作業を行うことは「オラ・エト・ラボラ」の会則に従う、神への善行とみなされた。

656年パリ郊外に創立されたベネディクトゥス派サン・ドニ修道院の院長シュジュール(1081年～1151年)は、その回想録の中で、この修道院改築に際し「私はイヴリーヌの森(Forêt d'Iveline パリ郊外のランブイエ＝Rambouilletの森)へ急いだ。—その正午、深い藪とからみあったいばらをかき分けて、十二本の材木に印をつけてい<sup>(43)</sup>のである」と、サン・ドニ修道院が周辺の森の伐採により拡張改築がおこなわれたことを記している。

南ドイツのシュヴァルツヴァルトの南部最古のベネディクトゥス派聖ブラジーン修道院は948<sup>(44)</sup>年の創設時の土地を遙かに超えて拡大、大聖堂はヨーロッパで三番目に大きい。この修道院がシュヴァルツヴァルトの消失に与えた影響は大きい。

ライン河上流地域やシュヴァルツヴァルト地方での土地開拓の相当部分はベネディクトゥス派修道士の手によるものと言われる。この開墾を行った修道院のほとんどが1100年から1350年の間に、

この山地の東側の古い居住地域から移住したものであった。

土地開拓に特別な意味を持つというより、最大の影響を与えたのはシトー派修道院であった。シトー派は東部フランスのベネディクトゥス派であったシトー修道院に由来し、1098年設立され、十二世紀末には西ヨーロッパに500の支院を持ち、1300年には694、そのいずれもが森林開墾と新型農法の中心として活動した。シトー派はその理念により、俗世からの隔離と野外の肉体労働とを重視した。高額の寄進、特に農奴付き荘園の贈与を堅く拒んだため、荒れ地を開墾せざるをえなかった。森林を畑にし、沼地を牧場に変えた。譲り受けた農耕に全く適しない荒れ地の開拓に全力を注ぎ、ヨーロッパ、特に北部ヨーロッパ、ドイツの場合北部ドイツの開拓に莫大な貢献をした。

「シトー派修道院は自家経営と修道院の経済的独立を基本原則とした、(中略)区画された農耕地・牧草地・ぶどう園・森林・池等を有した。(中略)いわゆる『黄金なす草原』と呼ばれた小麦畑の育成はシトー派修道院のなした最も著名な事業の一つであり、今日北ドイツのローザレーベントとアルデルンとの間に横にわたる広大な小麦畑は、同派ヴァルケンリード修道院が周囲の五つのグランギアー穀物貯蔵所を兼ねた修道院の作業施設を中心に、極めて短期間に開拓したものである。」<sup>(45)</sup>

シトー派の開墾に関して、ヨーロッパの森林破壊の元凶はシトー派にあり、その理念はキリスト教の創造論的自然観にあるという評価があるが、この解釈には二つの点で問題があるように思われる。第一は、開墾と文明の問題、他の一つは、その理念が創造論的自然観にあったのか、という点である。この点に関して、前記の3. 中世盛期の自然観の中で幾つかのキリスト教的自然観を示したように、この派は森を開墾したが、修道院の周囲に必ず森を所有している修道院でもあった。人間と森林と農業や鉱業との相互依存を認め、開墾地の周囲に適当な樹林地を確保したのはこの派であったことを考慮する必要がある、一面的に断定できるものではない。

土地開拓に特別な意味を持つ第三のグループはプレモンテ会である。1119年ラインラント出身の聖ノルベルトNorbert(1080年頃～1134年)がランLaon近傍に設立した修道参事会で、中央ヨーロッパと北部ネーデルラントで同会修道院は拡大した。沼地を埋め立て、森林を切り開くことに奇跡的な働きをした、といわれている。<sup>(46)</sup>ライン川東部でもドイツ司教座に多くの開拓された土地を提供した。他方フランスとブリテン諸島ではシトー派と同一視された。

修道院は開墾のみではなく、水車、風車の利用を普及させ、これらの技術と真摯な信仰に裏付けされた精神力で巨大な自然征服のうねりをうんだ。これにより、西ヨーロッパからたちまちのうちに多くの原生林を消滅させ農地化した。<sup>(47)</sup>

他方、古い居住地に置かれた修道院は森開墾後、模範的な農業経営と森林経営を行うが、山麓や山岳の内部に設けられた修道院は、開墾後、立地条件の悪さで、限界にぶつかり、放棄、その跡が森林化されるものもあった。バーデン・バーデン近郊のリヒテンタール修道院は設立の際寄進された農奴付き荘園を持ち続け森の開墾をしていない。判明しているもので最古の法度は1144年のアルザス地方のマウエルミュンスター修道院のもので、森番修道士への訓示と森の保護と利用をとりきめたものであった。このように修道院は森林保護をおこなったが、それは時期的には開墾後であり開発後一転して森林保護に方向転換したものであった。

#### b. 領邦諸侯の森の開墾と保護

十世紀以降王領地の相当部分を委譲された聖界諸侯と俗界諸侯は地代荘園制(ドミニウム)をとり、領主として、土地の譲渡、入植、開墾の計画指揮権、農民の保護と裁判権を有した。この制度はドイツでは1848年まで継続された。平野部でも丘陵部でも、時期的には遅れるが山地でも、

土地に権利をもつ領邦諸侯が土地の開墾、農地化を計画的にすすめた。

十一世紀初頭フォルストに代る「ヴィルトバン=Wilt-ban」という表現が出現する。これは字義通りには「野生すなわち無主の地」だが、中世では王により授けられた、あるいは王から派生した、“Wald”に関する統治権と解釈された。この名称は、聖俗領邦諸侯の特別な法的保護下にあった森で、前述の領邦諸侯の「フォルストの森」に該当した。1232年皇帝フリードリッヒ二世の「領邦諸侯に有利な統治権の委譲の協定」により皇帝の統治権は領邦諸侯（ドミヌス・テラエ）に委譲された。この「ヴィルトバン」は今日「獵区」と訳されている。

前述の十三世紀末の東方植民は俗界領邦諸侯が計画指導した。ドイツ東部は民族大移動後、スラブ人が移住し、森を開墾したが小規模であった。したがってドイツ開拓者の入植時、広い地面は原生林で覆われていた。多くの地名が野生の地に入植したことを証明している。ブランデンブルク地方だけでも、その例は100以上存在する。後のプロイセン西部も開拓した。俗界領邦諸侯であるドイツ騎士団の国、「ハイドニッシュ」プロイセンでは開墾と入植は1320年頃ようやく本格化した。リトアニア境界に沿って残っていた猛々しい「wilt=荒野」の開拓は1600年頃に完了した。

森林保護に関して、領邦諸侯は森林の法律を定めた。マンテルによると、その土地とその土地の聖界領邦諸侯と俗界領邦諸侯が特定の森の地域に対して発布した森の管理や経営の統制のための法律は1250年から1600年までの神聖ローマ帝国に183あったという。特に聖界領邦諸侯の法律は森の管理や経営に関して価値ある定めを含んでいた。

十三世紀のザクセン法鑑「ザクセンシュピーゲル」は、木を取っていく者、木を取り去り、ひどい状態にした者、伐採木を夜中盗んだ者の罰則を定めている。<sup>(48)</sup>

### c 農民、村落共同体、マルク共同体の森の開墾と保護

1100年頃に始まる、農民の居住地は谷の本流や枝分かれしたいくつもの小さな谷へと侵入した。以前の集落は開放耕地＝「ゲヴァン」が計画的に三分され利用され、個々の農民の保有地が散在した集村＝「ハウフェンドルフ」の形態であったが、新しい集落は森を開墾した村落で計画的に分割された農地と森が家屋のすぐ背後に広がった村落＝「ヴァルトフーフェドルフ」であった。その他に孤立して定住する農家もあった。「ヴァルトフーフェドルフ」は森を開拓の際「フーフェ」という長さの単位を森の分画の尺度に用いて形成された村落形態である。家屋は村落の通りに沿って等間隔で列をして並び、谷底から山の屋根にいたる囲われた地形の地所を帯状に所有した。

今日市町村有林が多く存在する地域の平野部、丘陵部の森を開拓した。後にマルク共同体の母体となる村落共同体がこの開拓をおこなった。開拓の進んだ地域に残された森、を対象にしてい

て、閉ざされた原生林や山岳地域内部には村落共同体の跡は存在しない。

中世後期に荘園領邦諸侯や修道院の所有する森を割り当てられ、シュヴァルツヴァルトなどの山地開拓を単独でおこなった農民もいた。開墾に適し、開墾が必要な森が開墾され、農地、家屋の地所となり、他の部分は森として残された。

十一世紀十二世紀、マルク共同体の森における秩序と制限を含んだ「中世慣習法＝ヴァイステューマー、ヴァイストウム」<sup>(49)</sup>が出現する。「ヴァイステューマー」は中世慣習法、法度判告文、村法などと訳される。マルクの土地利用に関する荘園領邦諸侯とマルク共同体員との間の慣習法で、元来あった掟を文書化したものである。十一世紀から急速に増加し、十六世紀頂点に達した。ヤコブ・グリムによって収集され1840年から1869年に出版された。ヴァイステューマーは中世における農民の立場とマルクの森の法的、経済的状态を評価する資料となる。これは特にマルク共同体の分布地域で多数出現した。オーストリアやアルザスにも多数ある。南バイエルンと東バイエル

ンには比較的少ない。エルベ川東部の入植地には全く見られない。グリムはドイツ全体で約3千収集した。その多くは森の掟も含くんでいる。森の秩序ある利用、領主の権力の保護、狩猟に関する諸侯の利益確保がこの法律の動機であった。

#### d. ライヒスヴァルト=Reichswaldにみる帝国フォルストReichsforstの歴史

今日ドイツ各地で帝国フォルストはシュベッサルト、ケルンのランズベルガーフォルスト、ゾーレンヴァルトなど21ある。ハルツのフォルストはカール大帝に設定され、中世時代 皇帝ハインリッヒ1世がハインリッヒ獅子公に「伯の位と、ハルツの名の山にあるフォスルス」を授与したことにより、ブランシュヴァイク・リュネブルク伯公国が誕生し、ハルツのフォルストは伯公国の領地となり、他の領邦諸侯もハルツのフルストの一部を自己の所有とした。

ニュルンベルクのライヒスヴァルトは1021年、皇帝ハインリッヒ二世によりバンベルク修道院へ寄進され、修道院の所有となったが、後に帝国へ返却させられた。1273年、ルドルフ・フォン・ハプスブルクは皇帝戴冠の謝礼としてニュルンベルク城伯に森の統治権を譲渡した。当時都市ニュルンベルクの繁栄は膨大な量の薪材・木材を必要としていた。1294年、ライヒスヴァルトの森の産物を都市ニュルンベルクへ帰属する決定がなされた。1331年皇帝ルードヴィッヒはライヒスヴァルトの統治権を全面的に都市ニュルンベルクに譲渡した。1429年都市ニュルンベルク森の所有権獲得。現在もこの森は残っている。都市フランクフルトの市有林は中世のドライアイヒャー・ヴァルトバンの一部であった。1372年皇帝カール四世が8800グルデンでこのドライアイヒャー・ヴァルトバン<sup>(50)</sup>の一部を帝国自由都市フランクフルトに売却譲渡し、現任市有林となった。

これらはカール・ハーゼルの資料を参考にした。

これまで古代ゲルマン語“Wald”に対するキリスト教を中心にした中世の自然観を宗教史的に羅列してきた。それによりこれらの自然観が“Wald”の現実への対応から成立した自然観であること、だが成立した自然観が現実の“Wald”を規制することをも指摘しながら、中世盛期に至るまで論じてきた。中世キリスト教の自然観が多様であることを幾分か示しえたと思う。

残念ながら、中世初期の森の変遷、中世末期の森の変遷と自然観、更に中世全体の自然観のまとめは、枚数の都合でここに記載できなくなった。次回の機会に譲ることにする。

#### 引用文献

- (1) 梅原 猛著 日本文化論への批判的考察 「展望」8月号、後に「美と宗教の発見—創造的的日本文化論—」 筑摩書房 1967年に再録
- (2) 前提書 日本文化論への批判的考察 P.54
- (3) 前提書 日本文化論への批判的考察 P.54~55
- (4) 鈴木秀夫著 超越者と風土 大明堂 1976年 P.78, 168  
鈴木秀夫著 森林の思考・砂漠の思考 NHKブックス 1978年参照
- (5) 安田喜憲著 森林の荒廃と文明の盛衰 新思索社 1988年
- (6) 前提書 森林の荒廃と文明の盛衰 P.17
- (7) V.H.Küster, Werden und Wandel der Kulturlandschaft im Alpenvorland. Germania 64:533—559.1986
- (8) Andersen, S.Th., Aaby, B. and Ddgaard, B.V., Enviroment and Man, Jaurnal Danish Archaeology, 2, 1989, PP.184—196.
- (9) Hibbert, F.A. & Switsur, V.R., Radiocarbon deating of Flandrian pollen Jones in Wales



and northern England. *New Phytologist* 77:793–803, 1976.

- (10) 前提書 森林の荒廃と文明の盛衰 P.233～244参照
- (11) 前提書 森林の荒廃と文明の盛衰 P.247,248参照
- (12) リン・ホワイト著 青木靖三訳 機械と神 みすず書房 1972年 P.87,88
- (13) 前提書 機械と神 P.51
- (14) Herlihy, D.J., Attitudes toward the Environment in Medieval Societies. In. Bilsky, L.J.; Historical Ecology, Kennikat. 1980. PP.100–110
- (15) 前提書 Attitudes toward the Environment in Medieval Societies. P.101
- (16) 前提書 Attitudes toward the Environment in Medieval Societies. P.103,104
- (17) 前提書 Attitudes toward ... PP.107–109
- (18) 前提書 Attitudes toward ... P.111
- (19) 前提書 Attitudes toward ... PP.113–4
- (20) A. リヒター／G. ゲレス著 市場泰夫訳 ドイツ中世英雄物語 社会思想社 1997年 第一巻
- (21) 「告白」 Confesionesの第10巻35の1246 400年頃作。ドイツ語版 Bibliothek des Kirchenväter 1911～35.12Bände 参照
- (22) ヘレン・エラーブ著 井沢元彦監修 松谷浩子訳 キリスト教封印の世界史 1997年 徳間書房 P.186–187
- (23) Schaff, Philip. History of the Christian Church. Wm.B.Eerdmans, 1952 参照 上智大学中世思想研究所編訳監 キリスト教史 講談社 第三巻第四巻参照
- (24) Ferguson, Everett, McHugh, Michael P., Norris, Fredrick W., Encyclopedia of Early Christianity, New York & London, Garland Publishing .1990.
- (25) Augustine, Saint, The City of God. Book XIV. Ch.4. translated by Marcus Dods. New York. The Modern Library. 1950.  
アウグスティヌス著「神の国」岩波書店 1983年、多数翻訳がある。
- (26) 前提書 キリスト教史 第二巻
- (27) Russel, Jeffrey Burton. A History of Medieval Christianity. New York. Thomas Y. Crowell. 1968. 参照
- (28) LeGoff, Jacques, L'imaginaire médiéval. Paris, Gallimard. 1985. P.59–75
- (29) Bernheimer, Richard. Wild men of the Middle Ages. Cambridge: Harvard University Press. 1952.
- (30) ジョーダン、T. G. 著 山本正三・石井英也訳 ヨーロッパ文化 大明堂 1989年、P.152～154.
- (31) 前提書 ヨーロッパ文化 P.154
- (32) Haskins, Charles Homer. The Renaissance of the 12th Century. Cleveland & New York. Meridian Books. 1927.  
チャールズ・H・ハスキンス著 十二世紀ルネッサンス みすず書房 1989年
- (33) 今野国雄著 ヨーロッパ中世の心 日本放送出版協会 1996年 P.16 –165
- (34) ジャン・ギャンベル著坂本賢三訳 中世の産業革命 岩波書店 1978年参照
- (35) Aquinas, Saint Thomas. Summa Theologica. New York & London. Blackfriars. McGraw-Hill. Eyre & Spottiswoode.  
トマス・アクイナス著 神学大全 創文社 1965年
- (36) Otto von Freising. Chronik von Friedrich Barbarosa. Phaidon Verlag. Essen. 1990

- (37) Higounet, Charles. Les forêts de l'Europe occidentale du V au XI siècle. Spoleto. 1966.  
原題訳「5－11世紀の西ヨーロッパの森」(343－98)
- (38) Harrison, R.P., Forêts/Forsts. Flammarion. Paris. 1992. 日本訳 森の記憶 工作舎 1996年  
P.95－98.
- (39) Die Wundergeschichten des Caesarius von Heisterbach. Herg, Alfons Hilka, Dritter Band.  
Bonn Peter Hanstein Verlag. 1937
- (40) 前提書 Die Wundergeschichten des Caesarius von Heisterbach. 参照  
前提書 中世の心 P.172. 参照
- (41) フランチェスコ(1181年/82年～1226年)の伝記も多くある。ここでは二つを挙げる。  
チェラーノのトマス著石井健吾訳 聖フランシスコの第一伝記 あかし書房 1989年 アントニー・  
デ・メロ著谷口正子訳 小鳥の歌－東洋の愛と知恵－、女子パウロ会 1985年
- (42) 前提書 聖フランシスコの第一伝記 1989年
- (43) Sugar, De consecratione ecclesiae S. Dionysii. E. Panofsky. PP.95－97.  
原題名「聖ディオニシオス教会献堂式について」
- (44) 前提書 キリスト教史 第四巻参照
- (45) 今野国雄著 修道院 近藤出版社 1971年 P.218
- (46) 前提書 キリスト教史 第三巻 P.359.
- (47) Derby, H.C., The Clearing of Woodland in Europe, In, W.L. Thomas(ed); Man's role in  
changing the face of the earth. Chicago. 1956.
- (48) Hasel, Karl. Forstgeschichte – Ein Grundriß für Studium und Praxis. Verlag Paul Parey,  
1985.  
カール・ハーゼル著山縣光晶訳 森が語るドイツの歴史 筑地書館 1996年 P.145. P.183
- (49) 前提書 森が語るドイツの歴史 P.181
- (50) 前提書 森が語るドイツの歴史 P.149.